いっしきあおかい 一色青海遺跡(本発掘調査B)

所 在 地 稲沢市儀長町1丁目

(北緯35度14分11秒 東経136度45分18秒)

調 查 理 由 日光上流流域下水道事業 水処理施設築造工事

調査期間 令和5年6月~9月

調 査 面 積 440 m

担 当 者 樋上昇・鈴木恵介



調査の経過

調査は、愛知県建設局下水道課による日光川上流流域下水道事業水処理施設築造工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じて委託を受け、令和5年6月から令和5年9月に実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地である。近代の耕作土を除去した状態を第1面として、鎌倉時代~江戸時代までの主に土坑を中心とする遺構、さらに弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出・掘削した。第1面の遺構および包含層掘削後に検出される弥生時代中期後半の竪穴建物跡を中心とする遺構を第2面とした。調査面積は440㎡である。

立地と環境

遺跡は、三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道南岸自然堤防上に位置する。遺跡 周辺の現況は主に水田として整備され、大規模な圃場整備によって旧地形は残っていない。現況の遺跡周辺の標高はわずかに北東から南西側に下る地形となっている。地下水位は高く、標高0.8m以下で湧水が発生する。遺構検出面は標高0.7m前後であり、調査には常時排水設備が必須であった。

調査の概要

これまでの周辺の調査結果から、本調査区では、弥生時代中期後半の方形周溝墓や竪穴建物跡の検出が想定されていたが、想定通り方形周溝墓の周溝3条、竪穴建物跡8棟を検出した。方形周溝墓はいずれも隣接する過去の調査区で確認されていたもので、竪穴建物跡は2棟が隣接調査区の連続部分、それ以外の6棟は隣接調査区で未検出、あるいは本調査区で初めて検出されたものである。その他の遺構では焼土や炭化物、土器を多量に含む土坑がある。058SKは竪穴建物跡との切り合い関係が無いため前後関係は不明だが、第1面では検出されておらず第2面の竪穴建物跡と併存したと推定される。竪穴建物跡は、最も下層で検出された065SIと066SIは、遺構検出時の標高が0.5m以下、これより上層で検出された竪穴建物跡(051SI、053SI:図では記載省略)の検出面の標高は0.7m以上であり、間に整地層と考えられる遺物包含層を挟んでいた。また竪穴建物跡の内、065SIは埋土に炭化物、炭化材を多く含んでおり、焼失竪穴建物と考えられる。

ま と め 本調査区では、北半部で検出される遺構が多く、南半部では遺構が少ない結果となった。 関西電力送電線鉄塔の基礎部分によって大きく削平を受けるなど後世の影響も考えられるが、過去の調査結果を踏まえた遺構分布によれば、本調査区南半部から03区東端付近にかけて竪穴建物跡の検出されない範囲があり、その範囲では方形周溝墓、中世の土坑群が検出されるのみとなっている。この部分では旧河道400NRが破堤し北から南に向かい流路が形成されたと考えられており、これにより居住域として不適な範囲では竪穴建物跡の検出が減少したものと思われる。

(鈴木恵介)

